

資料

The collected works of Lydia Sicher : An Adlerian Perspective

17 Family Constellation

P176 Other Sibling Situations

資料 1

①『アドラー心理学入門』 H・オーグラー著 西川好夫訳

P 50

ところで、第二子がレースに勝つ時は、（こんどは）年長の子どもが扱いにくくなる。これは、第二子が女の子であるとき、とりわけ明らかである。この場合のレースは対等ではない、なんとなれば、女の子は、最初の十六年間、（男の子よりも）ずっと速く発育するから…。したがって、女の子が第二子である場合には、自然が彼女らを助けてくれるので、レースに勝つことは容易である。（こうなると）、男の子はたいてい、男子は女子よりも優っていなければならないという信念をもって成長しているから、兄は敗北感を取りわけ深くもつだろう。このことは、妹のいる男の子はしばしば神経症的な特徴をしめすという事実を説明してくれる。

P53

最年長、二番目、および最年少という、三つの注目すべき子どもの位置に加えて、なおもう一つわれわれの注意を要するものがある。アドラーは、『人生の意味』という著書の中で、子どもたち全部が女の子の場合、三番目の女の子は普通男性的な特徴をあらわすものだ、ということをクリフトン＝ミラーが指摘したと書いている。アドラーはこの観察が確かなことをみとめ、その理由を次のように説明している。その女の子は、自分が男の子でなかったことにがっかりしている両親のぐちを聞いたり、その気持ちを感じたりしているからだ、と。彼女は自分の女としての役割を不満に思うようになり、「男性的抗議」を展開する。数人の男きょうだいの中のただひとりの女の子は、しばしば、ひどく男の子っぽくなるか、あるいは自分の女らしさと弱々しさを過度に強調するか、そのいずれかの態度を極端な形で採るものである。（それに反して）、数人の女きょうだいの中の唯一の男の子は非常にむずかしい立場に立たされている。もしも両親が、賢明さを欠いて、女の子たちに、男の子のほうを高く評価していることを知られると、女きょうだいたちは結束して彼に対抗する。すると、（多勢に無勢の）男の子は、不安な反応を示し、なにごとであれそれを仕とげる自信を失い、その挙げ句柔弱な人間になるかもしれない。さもなければ彼は他の極端に走り、自分の男らしさを特に強調して、生涯女性を見下し軽蔑するかもしれない。

P306

男性的抗議（masculine protest）

女性が劣等感を克服しようとして男らしくふるまう傾向をいう。普通、女性の役割の拒否という形で示され、男装したり、飲酒、喫煙したりするほか、ときには、器質的原因もなしに月経障害をきたす場合もある。また、いわゆる「神経性食欲不振」の蔭に男性的抗議が隠れていることもある、という。なお、男性がことさら男らしさを強調したふるまいをする場合にも用いられる。いずれにせよ、アドラーによれば、これは人生問題の誤った解決の仕方ということになる。

②『個人心理学講義』 アルフレッド・アドラー著 岸見一郎訳

P120

女の子ばかりの家族のただ一人の男の子の位置も困難で問題になる。このような少年は、女の子のようにふるまうと一般に思われている。このような場合、全家族が女性のために構成されている限り、ある程度の困難はあるものである。家に入ったらすぐにその家族には男の子が多いか、女の子が多いかわかる。家具が違い、騒がしさも秩序も違っているのである。家族の中に男の子が多ければ、壊れているものも多く、女の子が多ければ、あらゆるものがずっときれいである。

このような環境にいる男の子は、自分を必要以上に男らしく見せようとし、男らしいというこの特徴を誇示しようとする。さもなければ、他の家族のように、女性的になるかもしれない。要するに、このような少年は、柔弱でおとなしいか、あるいは野生的になる。後者の場合は、いつも自分が男であるという事実を証明し、強調しようとしているように思えるだろう。

男の子ばかりの中の女の子も、同じように、困難な状況の中にいる。非常に静かで、女性らしく成長するか、さもなければ、男の子のすることなら何でもしようとし、男の子のように成長したいと思う。このような場合、劣等感は、非常に明らかである。なぜなら、男の子が優位である状況の中にいる唯一の女の子だからだ。この「唯一」と感じているということに、劣等コンプレックスの全てが表現されている。男のような服を着ようとしたり、のちの人生で、男性が持つと理解している（放縦な）性関係を持とうとする時、（劣等コンプレックスを）補償する優越コンプレックスが発達していくのを見ることができる。

家族の中の子どもの位置についての議論を、第一子が男の子で、第二子が女の子であるという特別ケースで終えることにしたいと思う。このような場合、二人の間には、絶えず激しい競争がある。女の子は、第二子であるからだけではなく、女の子であるという理由で、前へと駆り立てられる。彼女は、男の子よりも訓練し、その結果、典型的な第二子のタイプとなる。彼女は、非常にエネルギーで、自立している。それで、兄は、妹が常に自分を追い上げてきていることに気がつく。女の子の方が、男の子よりも、身体的にも精神的にも、ずっと早く成長するということは知られている。例えば、十二歳の女の子は、同じ年齢の男の子よりも、ずっと発達している。男の子は、このことを知るのであるが、なぜかは説明することができない。それゆえ、自分が劣っていると感じ、競争を諦めようと思う。もはや、前には行こうとしなくなる。その代わりに、逃げ道を探し始める。時には、芸術の方向に逃避の道を求めて進む。神経症になったり、犯罪を犯したり、精神病になる場合もある。競争を続けることだけの力がないとを感じるのである。

このようなタイプの状況は、「あらゆる人があらゆることを成し遂げることができる」という見解を持ってしても、解決するのは困難である。私たちができることは、女の子が追い越したように見えても、女の子の方が努力しているからであり、努力することで、より良く発達する方法を見出したからに過ぎないということを男の子に示すことである。また、競争の雰囲気減らすために、女の子と男の子をできる限り、非競争的な領域へ導くことができる。

③『実践カウンセリング ―現代アドラー心理学の理論と技法―』 野田俊作監修

特殊なきょうだい関係

P72

きょうだいの性別も考慮しなければなりません。男ばかりあるいは女ばかりのきょうだいの中で育つと、中で男っぽい子と女っぽい子ができることがあります。また、異性に対するつきあいかたが下手になることもよく見られます。

男ばかりの家族の一人娘や女ばかりの家族の一人息子は、自分の地位に不安になりがちです。この子の役割は両親が男女の役割をどのように評価しているかに左右されます。通常男の子は「おぼっちゃん」になり、女の子は、女性の役割が評価されている時には「お姫さま」になります。

きょうだいの数が多く、しかも男女混合である場合には、第一子でなくても長男あるいは長女である子は、やや第一子的になりますし、末子でなくても、同性中の最年少の子は、やや末子的になります。

④野田俊作の補正項

「中性化の時代 2011年09月17日（土）」

（略）

子どもは、発達の過程で、自分がどのようなものであるかを自分で決定する。親やきょうだいや学校や社会などの環境も、あるいは遺伝的な要因も、ライフスタイル形成に影響を与えるが、最終的にどのような生き方を採用するかは、子ども自身が自分で決める。一人ひとりが、自分がどのような人間であることを自己決断する。その一部として、女はどのような女であるか、男はどのような男であることを自己決断する。それには、遺伝も影響を与えるし環境も影響を与えるが、最終的には子ども自身が自分のあり方を自分で選択し自分で決断する。ボーヴォワールは、まるで女が女にさせられてしまうような言い方をしたが、そうではなくて、女の子自身がみずからどういう女性であることを決断して、それにもとづいて自己トレーニングを繰り返す。

アドラーの時代には、女性は制度的に差別されていた。たとえば選挙権もなかったし相続権もなかった。だから、女に生まれた子どもは、大きな劣等感を持った。そこでそれを補償する方向でライフスタイルを形成していくのだが、ある子どもは自分の女性性を必要以上に強調するし、ある子どもは自分の女性性を必要以上に拒否する。自分が女性であることを拒否して、まるで男性であるかのようにふるまおうとする選択と決断のことを、アドラーは《男性的抗議》 *masculine protest* という、すこし奇妙な名前と呼んだ。

現在は、社会制度上の男女差別はずいぶん改善された。それでも、女性であることは男性であることとは違っていて、したがって、ある決断が必要であることはむかしと同じで、決断するとそれなりに面倒なことがつきまとう。たとえば服装や所作や言葉使いに気をつけなければならない。それが面倒なので「女を捨てる」女性が出てくる。これは、アドラーの時代の男性的抗議、すなわち女性性の積極的な拒否、とは違っていて、ただ女であるのが面倒なだけで、男になりたいわけではない。いわば中性化してしまうわけだ。男性も同様で、男性であることには決断が必要で、それはそれで面倒なことがつきまとう。日本男児は敗戦の時にほとんど滅亡して、いまや男性であることを強く決断する必要はなく、かといって女性になる決断をするわけでもないので、男性も中性化している。

（略）

資料 2

①『実践カウンセリング ―現代アドラー心理学の理論と技法―』 野田俊作監修

特殊なきょうだい関係

P71

大家族の場合、家族布置（グループ）が複数であることがあります。年齢の差が開くと（通常5～6歳以上）、2つかそれ以上の家族布置ができたり、「ひとりっ子」ができたりします。しかし、大家族では、子どもがお互いに世話をすることを学ぶので、争いはかえって少なくなります。

大家族の中の年かさの子やひとりだけ年の離れた子は年下のきょうだいに対して親の役割をすることがあります。

早死した子や死産した子が家族布置では大きな役割を果たすことがあります。「あの世の子」と競争することは至極困難ですし、死んだ子は実際以上に理想化されることが多いからです。また、子どもが早死したり、流産や早産があったりすると、親は生き残っている子どもたちにたいして、必要以上に過保護になることがあります。

肢体不自由、虚弱児、知恵遅れの子などは、「特別扱い」になりがちで、「甘やかされた子」や「嫌われた子」になりやすい。もしその子に親がかまけると、他のきょうだいが腹を立てて、競合的になることがあります。貰い子や連子も親が「特別扱い」すると同じことが起こります。

両親や祖父母の双方か一方、その他の主だった大人のお気に入りになると、子どもは基本的な安心感が増します。

②『アドラー心理学入門』 H・オーグラー著 西川好夫訳

P54

子どもたちの中の1人がすぐれた美貌や知能をもっていると、他の子どもたちに対するその子どもの立場をつらいものにする。アドラーは、子どもの発達を樹木の成長になぞらえた。すなわち、一本の樹木が特に大きく盛んに成長すると、ひとりで多くの空間を専有し、他の樹々はその蔭に入って成長を妨げられる、というのである。

P55

われわれは、いまや、家族の他の子どもたちの間での、その子どもの位置によって、性格の発達に示される可能性を思ってみることができる。ただし、こうした可能性は多面的だから、それらについて決まった法則をつくることはできない。個人心理学は、しばしば、人間の発達について固定した体系をもたないといって批判されてきた。しかしながら、感情生活には「must（必ず...する）」などない。最年長の子どもがその位置の権威を誤用したからといって、二番目の子どもは皆反逆者に「必ずなる」とはかぎらない。個人心理学にとっては、孤立した「長子」とか「末子」とかというようなものはなくて、ただ、ある性格特性が、家族内における子どもたちの特殊な位置によって姿をあらわす傾向がある、ということを指摘しているだけである。個人心理学は、人を、ひとりだけ切り離して研究することはなくて、つねに彼を取り巻く世界と関連させて研究する。個人心理学は、長子はことごとく力の崇拜者となるにちがいないとは主張しないで、力への帰依者が長子たちである傾向があると主張するのである。たとい人びとが互いにどんなに異なっていようと、いつも家族内でのその人たちの位置を明らかにするある特性が見出せるという事実を考慮に入れるとき、われわれは、この事実を、性格は遺伝ではないという確固たる証拠とみなすことができる。羨望や嫉妬のように、われわれの生活を惨めにしている多くの特性は、それが、家族内の他の子どもたちと関連したわれわれの地位に由来する、児童期の間違った見解から起こっていることをみとめるとき、根絶することができるのである。